ベストピア Bestopia
第444号
2024年02月号
bestopia.jp
パリ通信
第146号

政治責任・任命責任・説明責任・まさか最後は無責任？

標記は朝日新聞2024年2月15日朝刊12ページ「かたえくぼ・国民」からの引用である。
私はできる限り政治と経済のことには触れないで小紙ベストピアを続けているが
14日の同新聞オピニオンのページに13歳の中学生の下記引用の投稿に触発された。

政治家は何をやっているんだ

何をやっているんだ。自民党の裏金事件を知った時の第一印象である。萩生田氏、西村氏、世耕氏など「5人衆」はじめ多くの安倍派議員は裏金を政治資金収支報告書に記載せずに、多額の金額をキックバックしていたということである。彼らがまず謝罪したのは、派閥の元会長である故安倍元首相に対してだった。さらに全て秘書らに責任転嫁をしているので、はらわたが煮えくり返る。この影響で安倍派はじめ自民党の４派閥が解散になった。この結果は正直しょうがないと思う。
岸田氏が首相になってから2年以上。あっという間に経ってしまった。本当に信じられないことが政治の世界でたくさん起きていて正直言葉が出ない。この事件もその一つで、また首相は野党や国民から批判されてしまうのだろう。
岸田首相がこれからどう責任を取るかに注目したいし、我々国民にも説明をお願いしたいと強く思っている。（以上朝日新聞2024年2月14日朝刊オピニオン欄掲載文投稿者氏名は記載せず）

この記事を読んで黙していることが恥ずかしくなった。よく推敲された核心をついた文章である。将来正義感に溢れる政治家になってもらいたいと思う。

⑴「彼らがまず謝罪したのは、派閥の元会長である故安倍元首相に対してだった。」
鋭い少年の純粋な感性である。『彼ら』の行動は極端におかしい。不思議な行為である。派閥に属していないものには理解できないが、憶測をしてみると「どれだけ安倍氏から恩恵を受けていたかが分かる。『彼ら』にとっては神様のような存在であったのかも知れない。」自分に恩恵（それがいかに不法なものであっても）を与えてくれた人間が神様になる政治の世界は恐ろしい。そして安倍氏の影響力の大きさにも驚異を感じる。死して尚悪を蔓延させる。影響を受ける人間がいること。それも政治家であること。私はアベノマスクを忘れない（500億円の無駄遣いも責任は追及されず）

⑵さらに全て秘書らに責任転嫁をしているので、はらわたが煮えくり返る。
責任転嫁は人類の歴史と共にあるが、それが慢性的に世に蔓延しってきているのに少年の怒りが頂点に達している。この純粋さと正義感を神が祝福してくださることを願ってい

る。責任転嫁は文明の発達に従って巧妙になっている。権限の大きい組織の長ほど責任を果たすべきであるのに責任転嫁が上手になっていく。上に行くほど責任転嫁をする権限が大きく与えられている。そういう矛盾が政治家にありすぎるが故に民間でもその構造が蔓延している。14日の国会討論をTVで見ていて嫌になることしばしばであったが、岸田首相が多言した言葉は「党として〜〜〜する」であって、首相としては責任を果たす機運ではない。「説明責任」という言葉は102回使用したようであるが多くは「説明責任を促す」又は「説明責任を尽くすことは大事だ」という内容で、自ら「説明責任を果たす」と言った言葉はなかった。おそらく首相を含めた『彼ら』は説明責任の意味を知らないのであろう。国会討論には何だか分からないルールでもあるかのようで野党の追及も中途半端で見ていてはらわたが煮えくり返る。

⑶岸田氏が首相になってから2年以上。
特に昨年9月23日からの第二次岸田内閣の出発は「刷新感」一杯で始まった。
刷新とは「弊害を除いて事態を全く新たにすること」「それまでの悪い面を一掃して事態を全く新しくすること」である。何が刷新されたのか。マスコミは5人の女性大臣が誕生したことを評価してこの言葉を用いた。しかし、副大臣と政務官計54人全員が男性との結果を見て出鼻がくじかれた。

「本当に信じられないことが政治の世界でたくさん起きていて正直言葉が出ない。」
真剣に報道を見聞している少年の純粋な思考には考えられない政治家の「虚言」が後をたたない。善と悪が転倒した自民党の動きは私にも理解できない。『彼ら』に良心があるのか疑いは晴れない。
安倍元首相が遺した最大の贈り物、「政治と宗教との悪しき絆問題」も雲に巻かれた状態が今も続いている。それに加えて「政治と裏金問題」。この中心人物は誰であろうか？確かに岸田首相も怪しくなってきたが、彼は中心人物ではない。中心人物の後始末に手を焼いているのが可哀想な顔付きで国会答弁をしてる岸田さんだ。

⑷岸田首相がこれからどう責任を取るかに注目したいし、我々国民にも説明をお願いしたいと強く思っている。
13歳の少年の思いは良識ある国民の注目であり、願いである。
2月14日の国会答弁で岸田首相は「説明責任」という言葉を102回繰り返している。
「102回空念仏の見本なり」と朝日川柳で歌われている。
「責任を果たす」とか「責任をとる」という言葉は1回もないからである。「党として説明責任を果たすよう促している」だけ。「党として云々」の中には主語がない。誰も支持したり命令する者もいない。首相（かつ自民党総裁）が方向性を示せない。要はリーダーが不在なのである。何故なのか？秋の総裁選を控えて『彼ら』に忖度しているのである。岸田首相は『彼ら』の親分に首相にしてもらった負い目がある。一度やったらやめられない魅力がある総理の地位をもう一で獲得したいから忖度から解放されない。国民のための政治よりも個人の地位保全の方が重要なのである。（多くの政治家に共通していることであるが）

しかし、刷新感で期待されてのだから、自分の地位を捨てても腐敗し切ったうみを出すべき絶好のチャンスではないか。火の玉になって、全身全霊で臨んだ刷新という言葉を噛み締めて欲しい。

説明責任は英語のアカウンタビリティ（会計情報の一種）からの援用である。
「アカウンタビリティとは、契約の経済学から発生した概念です。経営を委託する株主と、受託する経営者の間では、通常、会社の状況や経営者の行動に関する情報に格差があります。こうした状況では、経営者が常に株主の富を最大化するとは限らず、むしろ利己的行動をとる可能性があることから、この情報の差（情報の非対称性といいます）を埋めるため、経営者が企業の情報を開示する義務のことです。開示する情報の代表例が財務諸表を中心とする会計情報です。
「説明責任」と訳されるケースが多いですが、この場合には、経営者から従業員、企業から顧客や地域・社会など、より広い利害関係者に対して、会計情報に限らずより広い範囲の情報開示を指すケースが多く、「アカウンタビリティ」よりもやや広い概念といえます。」（野村総合研究所NRTより引用）

これを国会議員と国民との関係に援用すると「国会議員は国民が求める情報を（国益に反することは別として）国民に分かりやすく説明する責任があるということで、特に金銭については会計原則の真実性、明瞭性に基づいて公表する義務があるということ。従って今回のような「不明」ではすまされない。

今般、二階俊博元幹事長が使途を図書費として3年間で3472万円と明らかにした。びっくりするが「不明」とするよりは良心的だと言える。「不明」と口裏を合わせている『彼ら』は時が来ると（喉元過ぎれば）国民は忘れる者だと鷹を括り続けた親分の真似をしている。議論は既に「政治倫理審査会に出席するかどうか」にまで至っている。この審査会には実質的に罪を悔い改めさせる機能はない。出席しないでもいい、出席して嘘をついても何の罪にも問われない。幕引きの準備が出来上がっている。証人喚問の場合は嘘をつくと偽証罪となるから、『彼ら』の場合は「記憶にございません」と言い続ける。

このようにして『彼ら』を守る手段として「記憶しない」から「記録しない」となり「記載しない」とサタンは自己拡大を続けるが、私も少年のように最後の望みを岸田首相の良心に期待をする。不名誉な忖度文化を破壊して少しは国民のための真っ当な政治ができないものか。自己を捨てて歴史に残る誇りある首相になって欲しいと思う。

今、解散総選挙になっても『彼ら』に与する者たちが圧勝する。そういう構造と文化が出来上がっている。今、我々にできることは一つしかない。純野党が34%を取ることに協力することだ。一党独裁の弊害を嫌になるほど味わった世代である我々が賢さを取り戻さなければならない。次の選挙には『彼ら』に退いてもらわねばならない。『彼ら』が亡霊から解放されることを私は力の限りに願っている。（2024年2月15日記）

嘘のない空へ飛びたいシャボン玉

（上記の川柳は2月14日朝日新聞朝刊掲載、作者は北村純一さん）

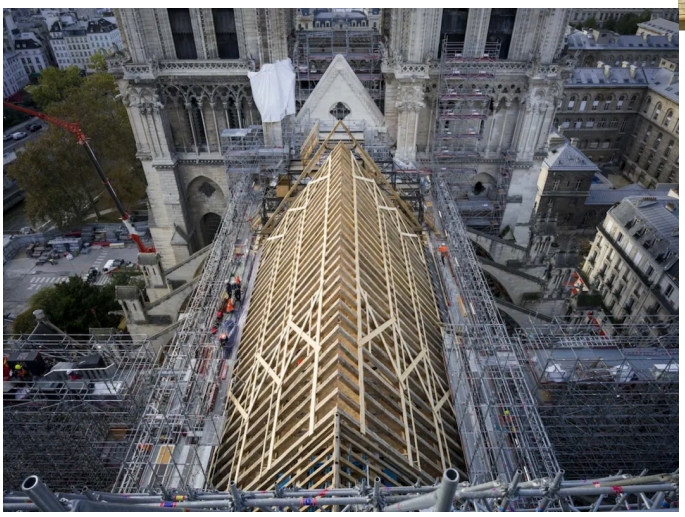
パリ通信・第146号

パリ・オリンピック2024

今日2月11日はル・コルビュジエが改造した船「ルイーズ・カトリーヌ号」(通称アジール・フロッタン)がセーヌ川に沈んだ記念日である。積もった雪が凍った2018年の寒い土曜日だった。あれから6年、浮上はしたものの船は今も修復工事を待つ難破状態が続いている。2024年パリ・オリンピックには修復工事が終わり新たな文化施設に生まれ変わることを目指してきたが相変わらず資金調達の目処が立たずプロジェクトは硬直したままで夢は叶いそうにない。

再建工事が進むノートルダム大聖堂

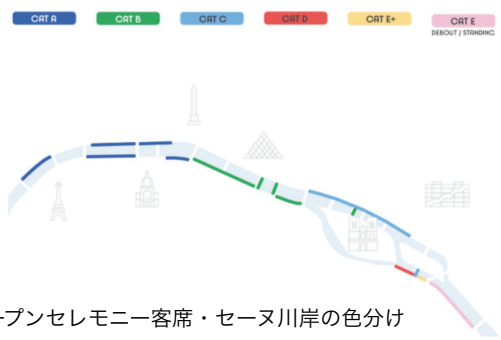
2019年4月15日火災が起きたパリ・ノートルダム大聖堂もオリンピック開催までに再建を目指しての工事が進んでいる。尖塔が焼け落ちた翌日から150の国を超える世界中から支援金の申し出が殺到し、8兆4600万ユーロの再建寄付金が集まった。5年の間に工事は順調に進み「フォレ(森)」と呼ばれる大聖堂の木組みの屋根が出来上がった。尖塔を飾る「雄鶏」(96mの高さに十字架上に座する聖遺物)も昨年12月に完成した。国宝であるノートルダム大聖堂の再建を指揮する文化財主任建築家の下に、石工、大工、金属加工職人、ステンドグラス職人、パイプオルガン職人、飛び職人、工事現場監督、クレーン車運転手など再建を支える各界の専門家たちの技術と熱意で修復が行われている。最新の技術を導入し、何世紀も続く教会建築のノウハウがしっかりと受け継がれている。7月26日パリ・オリンピック「オープニングセレモニー」までには終わらないだろうが再建は時間の問題だと思われている。



大聖堂「フォレ」　公式サイトより

2024年はパリにとって歴史に残る年となるだろう。オリンピックまでに終わるべき工事でパリ全体が工事現場と化しているが、本数が少なく日常的に遅れやトラブルが絶えないメトロやバスがオリンピック時の観客数に対応できるかは至難の業だろう。オリンピックを理由に至るところで値上げが見込まれ、2024年は特別の夏になるだろう。そして何よりも心配なのが「セキュリティー」の確保である。戦争や紛争が続いている中でパリでも

テロ事件は珍しくなく、安全にオリンピックを開催できるかが問われている。際たる例が「各国選手団が船に乗ってセーヌ川を行進する」オープニングセレモニー(7月26日20:00-23:15)だ。アンヌ・イダルゴパリ市長の発案で2022年10月時点では60万の観客を入れる予定だったが、今年に入って半分の32万人に縮小された。90€(立見席)(約1万5千円)から2700€(A席)(約45万円)までの6種類: A席2700€、B席1600€、C席900€、D席500€、E席250€、立見席90€の料金設定で右岸と左岸に振り分けたオープニングセレモニー券は



オープンセレモニー客席・セーヌ川岸の色分け

ほぼ完売である。観客数を減らすだけで警備の問題が解決する訳ではない。昨年10月のハマス攻撃からはアメリカとイスラエルはセーヌ川入場行進を拒否する意向を示した。パリにもスタジアムはあり警備上は船よりずっと安全だが、すでにセーヌ川行進チケットは販売されていて払い戻しは問題だ。そこで折衷案として、10500人の選手団を乗船させる代わりに国旗だけを行進させる内容に変更されるようである(2月7日「カナール紙」による)。国旗だけの行進であれば200人足らずで済み、1〜2隻の船で十分に用が足りる。オーステルリッツ橋からイエナ橋までの全長6kmのセーヌ川両岸、その間にある建物、窓、屋根の監視を僅か45000人の警察と警備員で行うのは大変なことである。この先も警備上の理由で変更や中止が行われる内容が出てくる可能性は大きい。

「ルイーズ・カトリーヌ号」が係留されているオーステルリッツ岸は当初は各国選手団乗船の控えの場所に利用される予定だったが、入場行進を出来るだけ短くするためにオリンピック実行委員会からオーステルリッツ岸の利用はないと正式に通知を受けた。フェンスで囲った工事現場状態の船はメディアに取り上げられることもなく、オリンピックとは無縁の存在になる。オリンピックでその存在を広くアピールできると思ったが立ち入り禁止区として終わりそうである。

観客なしで行われた東京オリンピックから聖火を受け継いだパリ。フランスが誇るブランド「ショーメ」(「LVMH」グループ)がデザインし、エッフェル塔建立時のオリジナル鉄片が添えられるという「金・銀・銅メダル」を発表し盛り上がりを期待するオリンピック開催委員会だが一般市民の関心は低く開催までまだまだ混乱は続きそうである。